

## 目次

第22回大会関連	P1	日中社会学会研究会報告	P 9
大会開催要項等	P4	ソシオロジー Rooted in Life	P14
大会プログラム	P5	事務局からのお知らせ	P15
大会会場へのアクセス	P8		

---

## ■第22回大会関連

### ■日中社会学会22回大会に向けて

中村則弘（日中社会学会会長・愛媛大学）

最初に何より、大会準備に奔走されている一橋大学関係者の方々、大会担当理事、学会事務局にお礼を申し上げたい。今年は、中国社会経済史・地域史研究の泰斗である江夏由樹先生による「奉天地方社会有力者と清朝皇室」についての講演、「グローバリゼーションとチャイニーズネス」、「現代中国の教育と移動」という2つのシンポジウムが用意されていると聞き及んでいる。どれも本学会ならではの、とても興味深い内容である。自由報告については、海外研究者のものもあり、いずれもが出色のように見受けられる。

これらの報告が、中国社会の理解にとどまらず、新たな時代の扉を開かんとする意欲に満ちているように見受けられることは、とてもうれしい。本学会の持ち味が、いよいよ発揮されている。会長任期における最後の大会でもある。事務局からの準備状況の報告をうけ、心からの充足感をもっている。

とはいえ、次年度以降に向けた、いろいろな課題も残されている。たとえば、「中日社会学会」や香港における関係学会との共同開催があげられる。さらには、欧米、とりわけ欧州の研究者たちとの連携による開催も模索してよいように思われる。中国はもちろん、香港や欧州においても、中国・日本を素材とした研究から新たな時代を模索しようとしている方々が、日増しに増えているという印象を持っている。別の言い方をすれば、いまや中国・香港・欧米との連携・協力が必要とされる状況を迎えているのだろう。これまでの本学会の取り組みは、間違いなく、こうした潮流と合致している。さらにいえば、この取り組みこそが、世界に向けて発信し得るわれわれの社会学なのだを確信している。

新たな時代への道筋を考える必要は、われわれの身近でも切実なものになっているのではないだろうか。それを実感させられる、ささや

かな出来事があった。

私事にわたり恐縮だが、連休中に父 84 歳が他界した。心筋梗塞であった。家族の前での、あつと言う間のことだった。「病院に入り、息子の世話にはなるようなことはしない」と意を決していたのだから、大往生といえ、そうだろうと思う。

通夜と告別式のため徹夜で行った法事録と過去帳の「解説」から、改めて慣習がもっていた複雑かつ巧みな意味合いを実感することができた。だが、親戚、町内会、同業者、友人・地域、寺院との関係をみても、その維持は困難であり、それは解体に瀕している。一方で、年金、保険、税金、遺産の処理をめぐる公的制度と社会慣習の間には、どうしようもない断層が作り出されている。こともあろうに公的制度が、いらだたしいまでに課題を深刻化させている。こうした解体と断層は、孤独死、生前契約、特殊清掃を身近なものとしている。散骨もそうである。これも多くの場合、そうせざるを得ないという事情によると聞いている。解体と断層のなかで、ともすれば「千の風になって」彷徨うしかないのである。

何のことはない。祖先崇拜、祖先祭祀そのものが行き詰まっている。これは歴史的にみたわれわれのアイデンティティが危機に直面しているとみることができる。種々の問題はあったにせよ、とても巧みに作り上げられていた慣習を、近代の名のもと無碍に解体に導いた結末がこれなのである。父の死をめぐる事後処理から、われわれが学んだことの無力さ、現実生活との大きなずれを実感した。さらには、近代というものが、いかに「死」ひいては「生」という根本課題を隠蔽したのかということをも痛感した。

改めて、22 回大会の記念講演、シンポジウム、一般報告の内容は、どこかで日本、中国からの根本課題の解決に向けた挑戦につながっていると思えてならない。その内容は、祖先祭

祀がそうであるように、日本と中国を跨ぐものとなっているのである。さらに、父の他界では触れなかったが、それはグローバルな関係を考えて行かねばならなくなっているのである。今回の大会の多くの報告はまさに、何らかの形でこの的を突くものになっている。われわれは、知らないうちに、世界に向けて発信すべき内容に踏み込みつつあるのかも知れない。このことでも、22 回大会は日中社会学会の新たな「旅立ち」を告げるものになると確信している。

## ■日中社会学会第22回大会を お受けするにあたって

南裕子（第22回大会実行委員長・一橋大学）

日中社会学会についての私のイメージは、新しい、若い学会であるというものでした。しかし、今回、大会開催校をお引き受けするにあたって、今年ですでに第22回目を数えるという事実を再認識し、諸先輩方が築かれてきた中国研究、日中学術交流の歴史の重みをあらためて感じております。

私が院生時代に初めて入会した学会は日本社会学会とこの日中社会学会でした。1990年代の初頭のことで、当時、社会学的なアプローチによる中国地域研究の先輩や仲間を周囲になかなか見つけられない中で、この学会の存在を知り、喜んで入会しました。そして、会員の方々の専門性の高さ、研究の射程の大きさから多くを学びました。これは、現在に至っても変わることなく、毎年、大会の場で全国各地の会員の方々と交流を深め、そして自らの研究への刺激を得ています。

今回は、ある意味この学会への恩返しとして、開催校をお引き受けいたしました。これまで自分が経験させていただいてきた知的刺激に満ちた場を、この一橋大学でも提供できればとの思いで、微力ながら現在準備を進めております。

会員の皆様もすでにご存じかとは思いますが、一橋大学は古くから中国研究が盛んな大学です。例えば、明治末期より「東洋経済事情」の講義が開講され、中国経済の動向分析を行うなど、中国に高い関心を寄せていました。また、社会経済史の分野の先人、根岸信教授そして村松祐次教授、さらには昨年社会学部を退官された三谷孝教授の社会史の諸研究には、本学会でも多くの会員の方々が触れられたことがあるのではないのでしょうか。

ところが残念なことに、これまで日中社会学会と本学との接点はほとんどなかったようです。そうした中、今回は、経済学研究科の江夏由樹教授に大会の特別講演をしていただけることとなり、大変嬉しく思っております。

江夏教授は、中国東北地域の近代史がご専門です。私は昨年、経済学部の「地域研究の方法」という授業を共同で担当させていただきました。中国における官と民間の関係、中間団体（宗族や同郷団体等）をテーマに、近代と現代それぞれの研究から迫るという試みを行いました。半年の間、お互いの講義を聴講しながら進めたのですが、江夏教授とは、対象とする時代は異なりながらも、多くの問題意識を共有させていただいていることを知りました。今回は、「奉天地方社会有力者と清朝皇室一溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち」というタイトルでご講演いただきます。取り上げられる史実の興味深さと共に、いかに「社会」をとらえるのかという点についても、我々の研究に大いなる示唆をいただけるものと期待しているところです。

なお、今大会のシンポジウムは、1日目、2日目共に学会の企画によるものです。2つのシンポジウムのテーマは、グローバリゼーションが東アジア社会にもたらす変動を検討するという点で通底しているのではないのでしょうか。本学会としてもこうした議論を一度きちんとしておく時期であるかと思えます。

最後になりますが、冒頭の「新しい、若い学会」というイメージは、「外に開かれ、常に新たな試みと問題提起を行い、若い研究者にも活躍の場が十分に与えられている」という意味では、まさにその通りではないかと思えます。今回の大会でも、こうした本学会の持ち味が、充分に発揮されるよう願っています。多くの会員の皆様のお越しを、新緑の国立キャンパスでお待ちいたしております。

## 〈第 22 回大会開催要項〉

日時：2010 年 6 月 5 日（土）・6 日（日）

会場：一橋大学国立西キャンパス

本館 2 階

参加費：一 般 2,000 円

学 生 1,000 円

非会員 1,000 円

懇親会費：5,000 円（一般）

3,000 円（学生）

懇親会会場（大会 1 日目 18 時から）：

一橋大学生協

西カフェテリア

## ■第 22 回大会 論著資料の配布コーナー 及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

## ■日中社会学会第 22 回大会 開催校の連絡先

186-8601 国立市中 2-1

一橋大学

大学院経済学研究科

南 裕子 研究室

メールアドレス：

yminami@econ.hit-u.ac.jp

電話 042(580)8810

Fax 042(580)8800

\* 共同研究室（語学研究室）の Fax のため、南宛であることを明記してください。

## ■第 22 回大会 中国の大学・中国の研究 機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

## 日中社会学会第22回大会プログラム

開催日：6月5日（土）・6月6日（日）

会場：一橋大学（国立 西キャンパス・本館2階）

（注）プログラムは一部変更となる可能性があります。  
当日会場にて配布される資料でご確認ください。

### 第1日 6月5日（土）

12:00～ 受付

13:00～13:05 開会式（西本館2階21番教室）

- ・会長挨拶 中村則弘（愛媛大学）
- ・司会 首藤明和（兵庫教育大学）

13:10～14:15 特別講演（西本館2階21番教室）

- ・江夏由樹先生（一橋大学大学院経済学研究科）  
「奉天地方社会有力者と清朝皇室  
——溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち」

司会 南 裕子（一橋大学大学院経済学研究科）

14:30～16:30 シンポジウム(1)「グローバル化とチャイニーズネス」  
（西本館2階21番教室）

司会 西原和久（名古屋大学）  
コメンテーター 金戸幸子（藤女子大学）  
賽漢卓娜（愛知学院大学・名城大学）

- ・中村 圭（同志社大学社会学部）  
「グローバル化における中国の『人才』流動」
- ・池本淳一会員（早稲田大学スポーツ科学学術院）  
「グローバル化の中の伝統的スポーツとチャイニーズネス——  
武術文化の変容を事例に」

16:40～17:40 総会（西本館2階21番教室）

18:00～20:00 懇親会（一橋大学生協・西カフェテリア）

第2日 6月6日(日)

9:00～ 受付

9:15～10:45 一般自由報告A (西本館2階24番教室)

司会: 陳立行 (関西学院大学)

- ・ 轟 海松 (東京農工大学)  
「中国農村部における高齢者生活と社会保障——2009年内モンゴルの調査から」
- ・ 呉 迪 (筑波大学大学院)  
「中国における基層社区教育の現状と課題——武漢市硤口区のアンケート調査をもとに」
- ・ 李 妍焱 (駒澤大学)  
「中国の草の根NGOの対政府戦略——変革と創造を目指す攻防」

9:15～10:45 一般自由報告B (西本館2階28番教室)

司会: 石井健一 (筑波大学)

- ・ 松谷 美のり (京都大学)  
「中国へ向かう若年日本人の生活戦略とポジショナリティ——香港、上海における現地採用就労者へのインタビュー調査を通じて」
- ・ シャザディグリ・シャウティ (株式会社インターージ)  
「サード・エイジャーのライフスタイルとインターネット利用——中国新疆ウイグル自治区における住民調査に基づいて」
- ・ 本田親史 (明治大学・法政大学)  
「中国インターネット研究方法論定位に向けての予備的考察——歴史的連続性・非連続性の観点から」

10:55～12:25 一般自由報告C (西本館2階24番教室)

司会: 池本淳一 (早稲田大学スポーツ科学学術院)

- ・ 王 鳳 (島根県立大学北東アジア地域研究センター)  
「改革開放以降の社会意識の変化に関する言説の一考察——「正しさ」の論理と「出来る」論理の狭間に」
- ・ 宮内紀靖 (Miyuchi Institute of Social-ty・中国瀋陽師範学院)  
「中国社会のシステム分析 [その壱]・・・第一世代のシステム分析(人体モデル)を用いて」
- ・ 卯田宗平 (東京大学・日本学術振興会特別研究員)  
「村落の変化にかかわる共通性と相違性——中国・長江流域の村落を中心としながら」

10:55～12:25 一般自由報告D (西本館2階28番教室)

司会: 中村則弘 (愛媛大学)

- ・ 馮 偉強 (愛知大学大学院)  
「日中間における国際出稼ぎ労働者の社会的ネットワーク——中国人研修生・技能実習生を事例として」
- ・ 巴 芳 (同志社大学大学院)  
「中国人社会におけるネットワーク研究の転換——伝統ネットワークから友人ネットワークへ」
- ・ Heung-wah WONG (香港大学)・Hoi-yan YAU (ロンドン大学)  
“Kinship and Its Relevance to the Discourses on Sex and Sexual Behaviours in Taiwan: A Call for the Return of Kinship Studies”.

13:30~16:50 シンポジウム(2)「現代中国の教育と移動」(西本館2階21番教室)

司 会 浅野慎一(神戸大学)  
コメンテーター 滝田 豪(京都産業大学)  
松木孝文(名古屋大学)

- ・植村広美会員(日本学術振興会・特別研究員)  
「農民工子女の教育機会に関する制度と実態」
- ・アルタン・バートル会員(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)  
「現代中国における少数民族教育の変容と教育格差—モンゴル族の事例を中心に」
- ・奈倉京子会員(京都文教大学)  
「中国人帰国留学生の文化的経験」

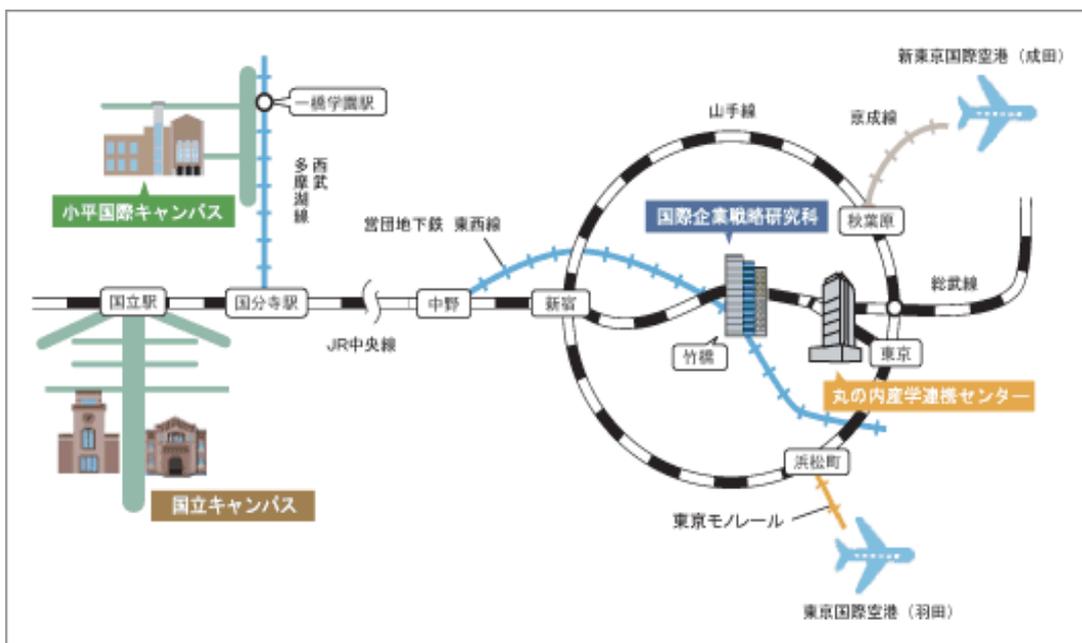
16:50~17:00 閉会のあいさつ(西本館2階21番教室)

大会担当理事 西原和久(名古屋大学)・浅野慎一(神戸大学)  
大会実行委員長 南 裕子(一橋大学)

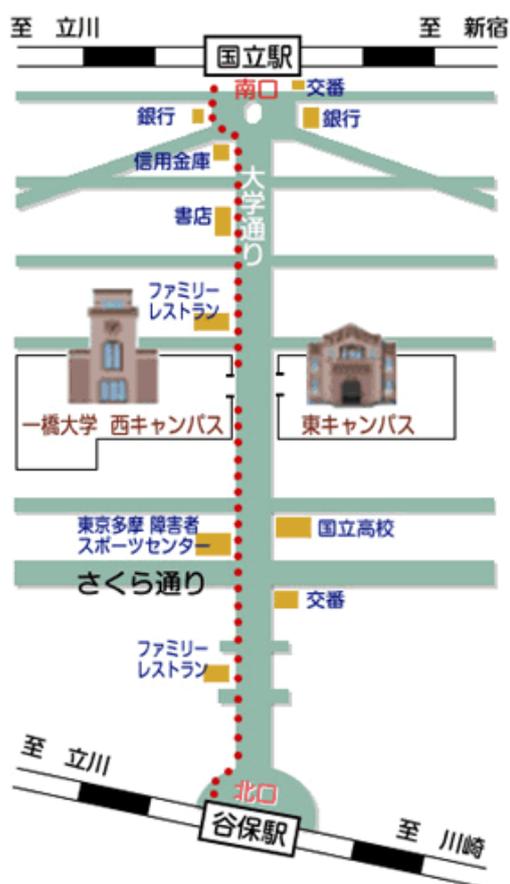
受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー(論文の抜刷やコピー, 調査報告書などの配布)
- 書籍販売コーナー(著者割引での販売など)
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー(資料やコピーなどを置いておく)
- その他(若手研究者の自己アピール, 他学会の紹介, 中国・欧米の研究動向の紹介など)

■会場（一橋大学・国立キャンパス）へのアクセス



国立駅から西キャンパスへの道順



JR 中央線・国立駅下車 徒歩約 6 分  
 \*新宿から 33 分。  
 \*中央特快乗車の場合は、国分寺駅  
 で快速に乗換え。

JR 南武線・谷保駅下車 徒歩約 20 分  
 バス約 6 分  
 (国立駅行 一橋大学下車)

\*当日は、学園祭（小平祭）と重な  
 ってしまいました。小平祭は東キャン  
 パス、本学会は西キャンパスで開  
 催されます。どうぞお間違えのない  
 ようお越しください。

■宿泊施設について

残念ながら国立にはありません。  
 付近では、立川駅、国分寺駅の周辺に宿  
 泊施設があります。

## ■日中社会学会研究会報告「村を語る」

首藤明和（事務局・兵庫教育大学）

### ●研究会「村を語る」

- 日 時：2009/12/05（土）13:00～18:30
- 場 所：東京農工大学農学部本館 2F24 号講義室
- 共催者：日中社会学会・東京農工大学農村社会学研究会・C F C（現代農山漁村家族研究会）
- 発表者：1. 高橋 明善（東京農工大学名誉教授）  
「自然村再考」  
2. 首藤 明和（兵庫教育大学）  
「自然村考察の現代的意義——村落研究の日中比較から」  
3. 福田 恵（東京農工大学）  
「日本のむら論争と自然村——その論点と可能性」
- 司会者：牧野修也（神奈川大学）、福田恵（東京農工大学）

日中社会学会・C F C（現代農山漁村家族研究会）・東京農工大学農村社会学研究会の共催で、2009年12月5日、東京農工大学農学部にて研究会「村を語る」を開催しました。

参加者は30名あまり、報告者だけでなく、フロアを巻き込んだの熱気に溢れた村の語りは、予定の終了時間を軽く超過し、2次会に場所を移しての議論も深夜にまで及びました。

このたびの共同研究会開催では、高橋明善会員、若林敬子会員、そして、福田恵氏といった東京農工大学関係者の先生方から、たいへん大きなご助力を賜りました。記して感謝申し上げます。

各報告の内容を、司会を務められた福田氏の総括から紹介しますと次のようになります。高橋明善報告では、「農村研究者（明治以降の多分野にわたる学者たち）が、農村の人の繋がりをいかに掴みだそうとしたか、その際の実態のズレと学者の見解のズレを詳しく解説し、鈴木と有賀のむら論の形成プロセスと揺らぎのプロセスを、単なる学説史としてではなく、じかに見聞きしてきた人間像、エピソードも交えながら語っていただきました。」首藤明和報告では、「村研で一種タブーとなっているかわた村の諸研究から、話を説きおこし、われわれ日本の農村研究者が想定する「むら」とは支配構造も領域も社会的結合も異なるむらを提示していただきました。また、そうした秩序と通底する地域構造の一つの型として、移動と定住のなかで形成された中国南部香港のむらの事例をご報告いただき、「自然村」を人間的連帯のなかで問う可能性を提起いただきました。「自然村」を常識的、教科書的にみる見解とは異なる斬新な二報告の後、私福田は、スタンダードなむら論と両者との接点を求めるべく、「自然村」がさらされた批判と、諸論争を概説し、論点とそれに準じた、今後の可能性について指摘しました」。

また、福田氏は、発表者の報告を逐語で記録してくださいました。研究会の臨場感をお届けするために、次頁以下、高橋明善会員による報告の冒頭部分をご紹介します。

## 「自然村再考」

報告：高橋明善（東京農工大学名誉教授）

記録監修：福田恵（東京農工大学）

### はじめに

あの～、暇なもんですからね。いろいろと古いことを調べていると、思わぬ発見がですね、多少の金があると・・・もう買えませんけども、たとえば町村合併史なんかは7万から10万ぐらいするんですよ。一つの県で。それはとても買えませんよ。買えないですけども、まあ1万円越すとちょっと考えちゃうんですけども、まあ本を集めたりすると非常に面白いことに気がつくんですね。ええ、有賀さん、有賀喜左衛門氏や、鈴木栄太郎氏の著作集に入っていないのをいくつか発見することもありますし、そこで思わぬことが言われている。ということで改めて農村社会学史を考え直してみる。

前から、むらの問題、自然村の問題ですね。これが現在の農村社会学会に村研ではどうも行政村だというのが支配的なんですね。しかしこれは歴史学全体からみれば、むらっていうのは行政村だ、藩政村だ、行政村だ。自然村っていうのはない、というようなそういう考え方は歴史学の中では僕は主流じゃない、ちょっと日本村落研究学会も偏ってるという感じを受けるんですね。まあ、例えば村研会員で言いますと、そのへんと絡めて言いますが、有賀喜左衛門、中村吉治、蓮見音彦、長谷川善計、長谷部さんね、今の歴史学の。みんなこういうあの一むらは行政村だという立場をとっているんですね。え、古い時代では歴史学でも永原慶二、安良城盛昭っていう戦後の日本史学、日本の中世史学をリードし

た人たち、こういう人たちも、あのどちらかと言うと、中世奴隷制社会論ですね。中世奴隷制社会。ですからむらが内発的に発展していくようなむらがあるというようなことはほとんど言われなかった・・・。

それから有賀喜左衛門がコテンパンに叩いた清水三男さんが書いた岩波文庫になりますね。日本中世村落の研究<sup>1</sup>。これすごい本ですよ。文化論を含んだね。中世史の本ですごい本だと思うんですけど、これはあの一、治安維持法でひっかかって、監視中の身で書いた本ですね。日本中世村落の研究。昭和17年ですかね。有賀さんより早い。有賀さんが今度は清水三男を目の敵にコテンパンに叩いたんですね。『日本家族制度と小作制度』。考え方が違うんですね。まあ有賀さんのなぜ清水三男にこれだけ厳しく、かかったかということは、それなりにバックグラウンドがあると思います。いま、それ以上、立ち入りません。改めて読み直してみるとすごい本なんですね。若い時代に書いた本ですから。34歳でシベリアで死にました。え～、有賀さんはその他に噛みついたのは、一杯いるんですね。マルクス系の人に噛みついたんですね。野呂栄太郎さんは、有賀さんが名子の賦役を書いた昭和8年2月に品川警察署で殺されたんですね。講座派のリーダー。『日本資本主義発達史』を書いた、野呂栄太郎。これを、こういうのを批

<sup>1</sup> 書名は、清水三男著『日本中世の村落』（1942）、岩波書店出版の岩波文庫に再録（1996）。

判するのが有賀さんの『名子の賦役』、『日本家族制度と小作制度』に至る研究だったですね。そういう人たちが(つぶさに批判した?)。(のろいさんに)については慶応にも行ったんですけどね。そういう人たちがあの・・・清水さんは批判されますけど、野呂栄太郎については慶応にも行ったんです。野呂栄太郎、慶応大学出身ですけども。まあ、ほとんど有賀さんは戦後、・・・にいないですね。

あの一、僕は有賀さんの弟子です。授業受けてます。有賀さんの講義ノートも僕は持ってます。それを復刻しまして、柄澤君に頼んで復刻してもう原稿出来てるんですけども、まだ印刷ならぬ。印刷すると本屋が言っているんですけど印刷しない。あの一、そのまま有賀さんの原稿を、昭和29年に有賀さんの授業を聞いて『日本家族制度と家制度』、日本家族せ、何かあの一、日本社会と日本家族制度と・・・『家族制度と日本社会』というテーマの授業を受けたんですね。えー、そういう誤解を・・・有賀さん1年だけ授業をしたなんて書いている人もいるんですが、とんでもない。私は昭和24年からずっと・・・29年聞いてますから、有賀さんの弟子であるし、実は有賀さんがそういうどういう時代に(講義に)来たんだらうと、それを僕は調べて見ようと思って、調べている間に有賀さんの著作を全部読んで、気がついたことは、年代的にもすごいあの一は変化している。変化している。その変化しているのを皆さんね一、つまみ食いでね。昭和19年に一回だけ言った言葉が、有賀さんの理論になっちゃってね。一回だけで後は使わない言葉。今でもそうい

うのは、こないだ大内君の『むらを考える』<sup>2</sup>を見ても、昭和19年の言葉がそのまま有賀さんの理論になってしまってる。ていうことがずいぶん気が付いたんですね。それでこれまあ話してみると、そういう誤解がないようにやっぱり研究者の中で位置付けていろんな概念を使わないとまずいんじゃないかということに気が付いたんです。

有賀さんがどう言う時代にあったかと思ったら、昭和29年の授業を受けた時、有賀さんは全然沈黙している時代だったんですね。昭和25年ぐらいまでは活発に議論していました。それから30年、多少書いてますけどほとんどまとまったものは書いてないんですね。昭和30年の3月に、日本における公私の問題をテーマにしたんですね。オオヤケのワタクシ。今、流行りの公共性、共同性、私(わたくし)の問題。これを書いている最中に、一番最後の書き終わったところで僕らにこの授業をしたんですね。えー、何を言ってるのかなあと聞いて聞いたんですけどねえ、そこで昭和30年に公私の問題を書いて、それから再び執筆を始めるんですね。その経過はこれから喋ります。そういうことを見ている間に、ずいぶん有賀が気がつかなかったことがあるんだなあということも気が付いたんですね。そういうことも含めてそういうことを理解したうえで、つまり農村社会学史についてもう一回理解を深めていただいて、えー農村研究やってもらえればと思います。

ちなみにあの私の卒業論文は日本の農村家族ですから、家族にも関心があるんですね。やりたかったんですけども、えー、まあそのことは言いませんけども、家族の関心を非常

---

<sup>2</sup> 坪井伸広、大内雅利、小田切徳美編著、2009、『現代のむら：むら論と日本社会の展望』農山漁村文化協会。

に強く持っています。で、中国は昔から関心持っていました。首藤君のお世話で香港に2度ばかり行って報告したこともあるしね。で、福田さんは私の後継者みたいに来たんですけど、後継者ではないですけどね(笑)。あの一、島根県出身なんです。私も島根県出身で、田舎が近いので、私のことを正確に理解しないと、私はどっか地主の息子かなって思ってるかもしれないですけど、貧乏人の息子ですから。その一、まあそのうちそういうことは酒を飲みながら話します。

で、私は共同、そこに共同体論と書いてありますね。共同体という言葉は非常に安易に使われるんですね。極端な場合ねえ、安孫子さんが引き出したんですよ。安孫子さんの言う共同体というのは大家族なんです。大家族が共同体。結局はそういうことなの。ん～、それじゃー今日・・・考えることとは全然違います。それから、あのあれ、あの～歴史学の岩本さんは、労働組織が共同体だっていうんですよ。労働組織が共同体、これも特異な概念なんです。で、共同体がある、ないと人を批判している。これじゃ全然理解が得られないんですよ。それから共同所有を共同体に置いたりね。ヨーロッパの共同体をモデルにおいて、ヨーロッパの共同体はヨーロッパの共同体であってね、日本に同じものがあるわけがないです。ヨーロッパモデルによって日本にある、無いと言ったって、日本にヨーロッパと同じものが日本にあるわけない。そういう大塚史学以来の共同体論もあるんですね。実際、それは現在もうかなり厳しく批判されていますね。あの一、千葉大学にいた小谷汪之氏ですかね。共同体、ウェーバーやマルクスが描いたアジア的共同体ってのは、これはイギリス帝国主義が作り出した。税金取るために創り出した共同体なんです。現実

に古代にあったものではない。それをマルクスやウェーバーは、古典的な古代というのは原始時代の共同体だと描き出してしまったと、いうように言います。実際、ゲルマンの共同体だって、『諸形態』、マルクスの『資本制生産に先行する諸形態』とゲルマンの共同体とはバラバラなんです。マルク・ブロッホの中世農村史を読むとね。何も集団作ってなくて、ばらばらに農民住んでいる。ゲルマンの共同体。それが一番古い形態であるかのように描き出して、モデルに描いて日本に共同体がある、無いって批判しています。歴史のある時点でつくられた、ゲルマンの社会でつくられたものがね、普遍的なものであるはずがないんですよ。ばらばらだった。単なる集合しているものだった。アグリケーションにすぎない。それを集団、グループであるかのように解釈するのはマルクスさえも間違いだと言ってるんですね。そういうところもきちんと整理しないとイケない。

幸いにして社会学はここに書いてあります。コミュニティ論を持ってるんですね。コミュニティ論。私若いころコミュニティ論の論文を書いたこともあるんですけども、園田先生、私の同期の、もう病気で入院してますけども、コミュニティ論の専門家ですが。彼らと議論したのは、要するにコミュニティは地域性と共同性を基礎に形成される集団で、小コミュニティから、地域・民族・世界、同心円状に広がる。このコミュニティ概念を持ってきますとねえ、世界中のいろんな共同社会が統一的に理解できるんじゃないかというように思っています。まあ考えて下さい。コミュニティ概念を持ってくるとね。

実際に、ドイツに行きましてね。ゲマインデは共同体だと思うでしょ。錯覚しちゃいけない。ゲマインデというのは、あれは、地

方自治体のことなんです。市町村、行政単位なんです。ドルフなんです。村に該当するのは、ドルフなんです。ドルフゲマインデという言葉があるのかは知らないが、ドルフという教会共同体です。それが末端の単位で、ゲマインデを見て、いくら研究してみたって、これじゃ村の研究にならないんです。そのあたりの錯覚もあるように思いますが、そのあたりは詳らかにしません。

僕はやっぱり単一歴史観。これは有賀さんと同じです。単一的な共同体の発展史観というのは立たないということですね。えー、いろんな国にいろんな形のコミュニティがあると。そのひとつの形が共同体、村落共同体、ヨーロッパの村落共同体がつけられるし、日本の村がつけられると、中国の村がつけられると。コミュニティの存在形態ですね。それが歴史の中でいろんな国でいろんな形で作られたんだ、というように思うんですね。

そこに書いたように、柳田國男がむらの成長力って盛んに言いますが、柳田國男は批判されますけど、結構言いこといっぱい言ってるんですよ。柳田も有賀さんに関連してかなり読んでみました。なかなかあの全集を全部読むわけにはいかないですけどね。まあ主要なものは読んでみました。

そこでまず取っ掛かりになったのは、庄司俊作氏が村研ジャーナルで前々回で僕が編集委員だったので事前に読んでたんですね。村落範囲の不一致問題を議論しているんですね。それでいろんなことを考えたんですね。じゃあ私も検討してみよう、というように思いました。それでそこから始めたんですね。村についていろんなことを考えさせるんですよ、不一致問題を議論すると、考えさせてくれるので、それを考えてみようと思ったんですね。

ここでもう一つ鈴木・庄司の問題提起って

いうのがあります。村落範囲の不一致問題。目次を見ていきましょう。一番最後のページに目次があります。『自然村再考』、えー、そこに藩政村、大字、部落、農業集落、むらって言葉があります。これはそれについて考えるんですね。不一致問題です。それから2番目には、第2に大きいのは、日本における自然村概念がどういう形で形成されたかっていうのをちょっと歴史的に追っかけました。思わぬことにいろいろ気が付きます。

3番目には、それ(2番目の議論)は鈴木さんの議論を中心にしますが、有賀さんの村論。有賀先生は家論が基本ですけども、村論を展開しているわけで、これだけ限定されたものだ、有賀さんの村論はたいへんに限定されたものだということも理解していただきたい、というように思います。

最後に、あの一、現在の歴史学のいわれるような村の捉えなおし議論ですね。ちょっと紹介しておきたいというように思います。そういう流れで見ていきます。……(以下、第1章に続く)(後略)

～☆～

紙幅の関係上、全文を掲載することができないのはたいへん残念です。高橋会員の報告の端々からも感じ取れるように、「むらの研究」のもつ分析射程は、たいへん広く豊かなものがあります。むらを研究することの意義は、近代知の再帰的構成ともあいまって、常に現代的意義を伴っています。

上述のように、高橋会員の報告は、福田氏によって逐語で記録されています。福田氏のお気持ちでもあり、また首藤自身もそう考えているのですが、「むらの比較社会学」を志す若手研究者のためにも、今回の研究会の内容を、何らかのまとまった形で残しておこうと考えています。

## ■ ソシオロジー Rooted in Life

### 在 中 通 信

大阪大学大学院 博士後期課程  
伊藤 麻沙子

私はこの2月末から、甘肅省蘭州市で暮らし始めました。ここはかつてのシルクロード上であって、地図で見ると、蘭州の右手に西安、左手に敦煌があります。私の地元秋田県の秋田市と蘭州市は友好姉妹都市になっています。

蘭州市は現在、都市開発が進行中の地域で、あちらこちらに建設中の建造物があります。空港の周辺はとて殺風景で、風が吹けば土ぼこりが舞うような粒の細かい土壌がむき出しの広大な大地が広がっていました。そして、その遠方には険しい岩山が続いています。そこから車で約30分、市内に向かうにつれて、黄河沿いに高いビルや建物が見え始めます。中心街は、私の印象では、札幌市や福岡市を思わせるような繁華街になっています。

私はこちらに着いて、一週間足らずで、風邪を引いてしまいました。蘭州は3月になっても、まだまだ気温が低く、日によっては氷点下になることもあります。とはいっても、非常に乾燥が激しいため、雪はほとんど降りません。これは雪国育ちにしてみれば、驚きの自然現象でした。その乾燥の強烈さは、洗濯物の乾く速度で分かります。厚手の物でも2~3時間足らずで、完全に乾いてしまいます。おかげで、手足やひじはアカギレだらけにな

ってしまいます。

これまで観光目的で中国を訪れたことが1~2回ありましたが、現地に住みこんで生活するのは初めてです。長期滞在の場合、私はそこに何とか適応しようとするために、日中の様々な違いよりも先に、似ていることの方が目につきます。今回はそのうち2つの類似点について、雑感を通信したいと思います。

1つめは犬について。私が今住んでいるところでも、犬をよく見かけます。地元では空前のペットブームともいえるほど、多くの家庭で犬を飼っていました。実家でも2匹飼っています。まさか蘭州に来て、野良犬ではなく、きちんとした飼い犬をこんなに毎日見かけるとは思っていませんでした。中には服を着ている犬もいますし、散歩用のハーネスを着けた犬もいます。驚いたのは、長く垂れ下がった耳の毛をピンクに染色したプードルです。チワワやポメラニアンのような超小型犬、またミニチュア・ピンシャーやボストン・テリアのように毛の量が非常に少なく、ほとんど皮だけの小型犬から、元祖中国のチャウ・チャウのような中型犬、そしてシベリアンハスキーのような大型犬まで見かけます。その中でも、よく見かけるのは中型犬より一回り小さい犬です。今後、中国の犬事情を調べてみたいと思いました。

2つめは老人たちの日常について。家のすぐそばに「老年活動中心」という施設があります。私は初め、これは老人ホームのような施設かと思っていました。日中、多くの老人たちが、この施設の中で囲碁のようなものをしています。また施設の外にはコンクリートに備え付けのテーブルと椅子、リハビリで使われるような健康器具が設置されていて、そこでも多くの老人たちがカードゲーム(トランプ)をしたり、談笑をしたりしています。時には、1人の老人が他の人たちに向かって、大

きな声で講義や演説をしていることもあります。しかし、その施設に住んでいる様子はありません。おそらくこの施設は、日本でいうところの「公民館」や「寄り合い茶屋」なのだと思います。私の地元でも、毎日ではありませんが、老人たちが1か所に集まって、ゲートボール、グランドゴルフや卓球をしたり、歌を歌ったり、レクレーションで簡単なゲームをしたりしています。その光景とこちらの老人たちの様子が、私の中でびったり重なって見えました。

およそ1か月の滞在で気に止まった類似点は、以上の2点です。最後に、中国語初学者の所感を述べて、蘭州からの通信を終えたいと思います。日本にいた頃には普段何気なく使っていた漢字でしたが、そのルーツが中国にあるという事実で改めて気づかされています。たとえば、店のドアに貼ってある「拉 pull」は、日本語では「引」です。後者は「ドアを手前に引く」という一動作を表します。ところが中国語では「ドアの取手を握って、手前に強く引っ張って開ける」までの全過程が、「拉」一文字でイメージされています。そのイメージで日本語の「拉致」という語を考えると、「誰かの手を握って、ぐいぐいと強引に引っ張って連れ去る」様子がより鮮明になりました。同様に、中国語の「拐」は「進行方向を変える」ことを表します。日本語の「誘拐」も、そのイメージで思い浮かべると、「言葉巧みに誘って、その人の行き先を変え、まんまと連れ去る」様子がありありと目に浮かんでいきます。たった一文字で、詳細な状況や豊かなイメージを表現してしまう漢字は、とても合理的だなあと、改めて実感しました。

## ■事務局からのお知らせ

### □新入会員

(2010年2月～5月に開催の理事会で承認)

(会員数228人：2010年5月14日現在)

### □事務局からのお願い

前号のニューズレターでも申し上げましたが、昨年度から、メールマガジンによる広報を始めました。事務局へご登録いただいたメールアドレスへは、「日中社会学会メールマガジン」が定期的に配信されます。

登録がまだの会員の方は、事務局までご連絡ください。また、メールアドレスに変更があった方もご連絡をお願いいたします。

---

### 日中社会学会ニューズレター No.59

発行：日中社会学会事務局

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

兵庫教育大学・首藤明和研究室

info@japan-china-sociology.org

○吉岡智子（事務局・業務補佐）

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2010年5月